みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マヤ文字を解く

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5555

中公新書 644

八杉佳穂著

マヤ文字を解く

中央公論社刊

装幀　白井晟一

目　次

まえがき

一章　マヤ文字の解読にむけて

歴史を語りはじめたマヤ文字　マヤ文明の栄えた土地　メソアメリカ文明のなかのマヤ文明　マヤ文字の登場　マヤ古典期　マヤの社会　マヤ文明崩壊の謎　マヤ後古典期　マヤ文字の解読史　マヤ文字研究にむけて　テキストの形態　テキストの読み順　文字の構成

二章　暦とアルファベット

ランダの『ユカタン事物記』　二六〇日暦　三六五日暦　カレンダー・ラウンド　暦の文字の読み

方　『ポポル・ブフ』から　急速に失われつつあるマヤの暦　ポブの文字　色の文字　セックの文字とマックの文字　ランダのアルファベット　マヤ文字の特徴　「誕生」を表わす文字

三章　数字　87

丸と棒で表わす方法　頭字体で表わす方法　幾何体で表わす方法　全身像で表わす方法

四章　時を記す方法　99

長期暦　イニシャル・シリーズ　月シリーズ　八一九日周期暦　セカンダリー・シリーズ　「期間の終り」を表わす文字　短期暦

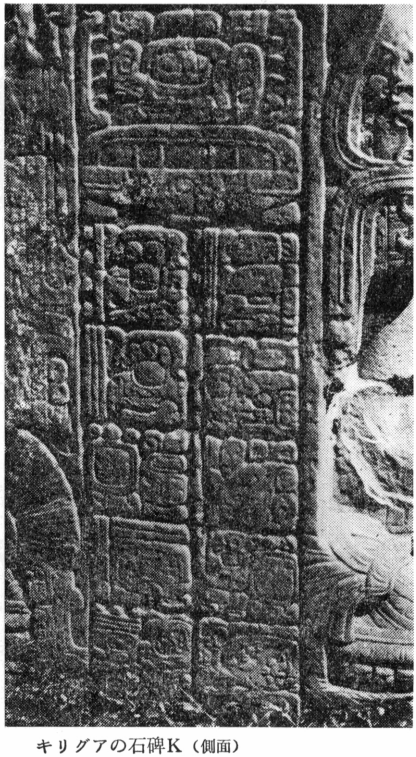
五章　テキストの分析にむけて　141

一九六〇年に証明される　紋章文字の発見　碑文にかくされていた歴史　即位の文字　女性標示文字　征服に関する文字　結婚を表わす文字　親族に関する文字　儀式に関する文字　テキストの構造　テキストの分析の方法

六章　テキストの分析

ピエドラス・ネグラス　ヤシュチラン　年齢の問題　王の名前　女性　パレンケ　ティカル
ナランホ　キリグアとコパン　横のつながり
王たちはなにを碑文に記したか
研究の手引　236
あとがき　237

マヤ文字を解く



キリグアの石碑K（側面）

図版出典

図6、図7、図24、図27、図28、図31、図34、図36、図38、図39、図40、図41、図44、図45、図46、図47、図48、図49、図54、図56、図58は J. E. S. Thompson, *Maya Hieroglyphic Writing : An Introduction*, University of Oklahoma Press, 1971 (1st ed. 1960) より。

まえがき

マヤ文明というのは、不思議な文明である。どうして熱帯雨林の暮しにくい環境のなかで、マヤ文明は栄えなければならなかったのか。どうして新大陸で、マヤだけが発達した文字体系をもちえたのか。どうして人力しかない石器時代の素朴な技術で美しい彫刻や建築をもつ都市を築き、進んだ科学を生みだしえたのか。科学を発達させ、美しい芸術作品を生み、新大陸の他の文明の到達しえない高みにまで達したマヤ文明が、なぜ滅ぶことになったのか。なぜ、どうして、という問いを発したなら、それこそきりがない。

内容の不思議さに加え、研究者にも風変りな人が多かった。一〇七歳で女性にみとれていて卒中にかかり死んだというワルデックをはじめ、じつに興味深い人々が、マヤ文明にとりつかれている。それらの人々の跡をたどるだけでもたのしい。

不思議といえば、新大陸でもっとも重要だと思われるマヤ文明が、日本では本格的に研究されなかったこともその一つにあげられる。

マヤ文明に関する謎はつきることがない。マヤと聞いただけで神秘的な気分にさえなる。しか

し謎の多くは、いま、徐々に解明されつつある。もはや不思議な、神秘的な文明とはいわれなくなっている。

マヤ文明は現在、考古学や民族学、言語学など、いろいろな角度から研究されている。とくにこの一〇年あまりのマヤ学の進歩には、目をみはるものがある。それゆえそれらの成果を総合してマヤ文明を述べることは、現在の日本では必要なことだと思う。だがもう一つ、私は、文字そのものについても書かれる必要があると思っている。それは、マヤ文明の最大の特徴である文字、その表わす暦など、多くの人々に興味がもたれているにもかかわらず、それらを扱っているものがきわめて少ないからである。また誤解も多いように思うからである。しかしそれにもまして私が本書を書こうと思った大きな理由は、私がマヤ文字の魅力にとりつかれたからである。考えてみれば、マヤ文字はマヤ文明を理解するための鍵であり、これほどマヤ文明を語る材料としてふさわしいものはない。いうまでもなくマヤ文字の解読は、文字の研究ばかりでなく、マヤ文明そのものの研究を必要とする、いわば総合学問であるマヤ学を前提とするのであるから、文字を扱うことで、少なからずマヤ文明というものを語ることもできそうである。

マヤ文字の解読には、解読できるかできないかの、ぎりぎりのヒントしかない。それゆえこれほどおもしろい謎解きはない。

解読の手がかりは、十六世紀にスペイン人のディエゴ・デ・ランダ神父の残したわずか三〇の

文字と暦の文字である。直接の手がかりはこれしかない。それを利用して解読しなければならないのである。ところが幸いなことに、マヤ族が現在でも二五〇万人ほど、マヤ文明が栄えた地域とほぼ同地域に住んでいる。彼らに手がかりを求めることができる。とはいうものの彼らは、昔のものをほとんど失ってしまっている。それゆえ現代マヤ人の研究に解読の糸口をみつけることは、実の少ない、手間のかかるむずかしい仕事となる。さらにマヤ文字資料そのものも少ない。本書では、こうした少ないヒントをもとに、マヤ文字とはどんな文字なのか、文字からみたマヤ文明の研究、さらにはマヤ文明というものはどんなものかを考えてみようというのである。

まずはじめに、マヤ文明やマヤ文字の解読史などの一般的な概説をし、二章で、手がかりとなった二六〇日暦と三六五日暦の文字やランダのアルファベットの解説をし、マヤ文字の性格を考えてみる。そして三章で数字を扱い、四章で長期暦や短期暦などの暦の説明をする。五章では、テキストを分析する上で必要な文字の説明を行なう。そして最後の六章でテキストの分析を試み、マヤ文字からみたマヤ社会を描いてみたいと思っている。